

## B O O K

『細胞診の  
ベーシックサイエンスと  
臨床の実際』

編集

大森赤十字病院 顧問

坂本 穆彦

病理医をはじめ40年にもなろうというのに、細胞診に苦手意識を持っている。基礎医学部門としての病理学教室に入室し、動物実験と細胞培養、病理解剖、そして外勤先での病理組織診断という形で育ってきた背景もあり、細胞診とは真っ向から向き合うのを避けていた。実際、剥離細胞診、擦過細胞診などは落ちてきた細胞を診るもので、いわば道に落ちた枯葉を見つめ、どの樹木から落ちたのかを考えるようなものと思った。言いえて妙でexfoliative cytologyのfoliaとは“葉”である。病理専門医取得から10年を閲して、細胞診専門医の資格を取った。基礎から病理診断科に移った今も、組織診に比して自信がないのは、多くの病理医と同じ穴の貉であろうかと思う。

このたび、坂本穆彦先生が編集された「細胞診のベーシックサイエンスと臨床の実際」を拝読する機会を得た。まずベーシックサイエンスという用語に惹かれる。従来の細胞診のテキストは各疾患の代表的な細胞像が主体で、オレンジ色と緑色に染まる細胞の写真が多く掲載されているのに対し、本書は第1章で、「腫瘍の細胞生物学・分子生物学・分子遺伝学の基礎」を扱っている。がんゲノム医療時代に病理診断/検査関係者が知っておかねばならない基礎から説き起こしてくださっているのが嬉しい。第1章を読めば、細胞診に限らず腫瘍病理学に携わる上での基礎知識が整理される。それを受けて第2章では「押さえておきたいがんゲノム医療」で、まさにがんゲノム医療の実際に触れている。この辺りは分子病理専門医の受験前には有用と考える。第3章では各領域の疾患を扱っているが、単に細胞像の羅列ではなく、臨床的側面、画像診断、新しい検体採取法に重きを置いている。病理サイドの人間が取り残されがちな臨床との連携が詳述されている。第4章では「細胞診の新時代」ということで、LBC、AI、遠隔診断といった新技術を取り入れての細胞診断とともに、諸外国の実情も紹介されている。

細胞検査士や細胞診専門医試験での鏡検試験(最近では顕微鏡ではなくバーチャルスライド?)の試験対策より、細胞検査士の一次試験(基礎知識を問う選択問題が出題)の対策や、細胞診専門医試験と前後して分子病理専門医試験(いずれも毎年12月に施行)を受験する病理医にお勧めする。もちろん、資格を取った後の現場のスタッフにも知識の整理、リニューアルという点で精読いただきたい。

坂本先生は、本誌の第5代編集委員として従事いただき、甲状腺や婦人科細胞診の大家であられ、病理学会や臨床細胞学会で指導を賜ってきた。お世話くださった第36回病理学会関東支部会学術集会(平成19年9月29日)のテーマは「細胞診と組織診のコラボレーション」で、常に両者を併せて正確な診断が得られるよう心掛けておられる坂本先生のお気持ちを体現する会だったことを思い出す。これからもぜひ私たち後進を温かく叱咤激励していただきたいと思います。

東京女子医科大学 病理診断科 教授  
長嶋洋治

発行：株式会社医学書院 〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23  
定価：本体 11,000 円＋税